

質疑応答

**あらかじめ配布した質問用紙により
参加者から寄せられた質問への回答
(途中、原爆症訴訟近畿弁護団の久米
弘子弁護士の報告と訴えがあった)**

山根 報告者のみなさんにたくさんの質問が出ています。テーマが内部被曝ということで、矢ヶ崎先生への質問が本当にたくさんありまして、丁寧に答えていただいていたら、もう8時くらいまでになってしまうんじゃないかというくらいあります。それで、最初に報告をされた順番で、伊東さん、それから高橋さん、山下さんに報告していただきまして、フロアから原爆訴訟近畿弁護団で活躍されています久米弘子弁護士さん、いらっしゃいますでしょうか、ちょっと発言をお願いしたいと思います。それからあと時間がある限り、矢ヶ崎先生に、全部はたぶん無理じゃないかと思うんですけど、よろしくお願いします。じゃあ、伊東さんからお願いいたします。

伊東 失礼します。記者クラブ問題についての質問がきています。報道姿勢についてどう思われますかという質問なのですけれども、今日、DVDを見ていただいておりますことと思います。先ほど矢ヶ崎先生も言われましたけれども、ECRRによると（全世界で放射線により）6500万人亡くなっています。その大半に影響があったであろうビキニ事件、これだけ大きな世界的な事件取材しているのが、愛媛県の片田舎のちっちゃなローカル局の、しかも報道部ではない制作部というグルメとか作っているところで仕事をしているディレクターが作っているという現実を見ていただいたら、大体おわかりいただけるのではないかなと思います。

民放というのは、企業ですので、当然様々なスポンサーを受けながら会社を運営しています。たとえばNHKだと政府との繋がり、ほぼ国営的という報道からくるしがらみがあります。その中で何を報道していくのかということに関して、みなさん、お察ししていただけるんじゃないかと思います。記者クラブというのがありまして、そこでいろんなしぼりがあって、あの人は入っているよ、この人はだめですよというところがあって、ここで、ある意味で報道の管理をしているというような状況というのが日本にはあります。海外にはありません。それは海外からもいろんな批判を受けています。

結局のところは、国民のみなさんが自分たちで正しい情報を精査して取り入れていくしかないというのが現状ではないかと。ですから、ある意味、放送という私たちが仕事しているところの情報は、インターネットというところにシフトしていて、そこからみなさんが選択していくという状況が起こっているのではないかと思います。

みなさん、ご存じかもしれないんですけど、アルバカーキー・トリビューンというアメリカのちっちゃな新聞社がプルトニウムの人体実験というのを本に出しまして、それがピューリッツァー賞をとりました。全米が動いて、大統領まで動いて、私が入りまし

たアメリカのエネルギー省の機密文書、そういうものもそこで放出されたということもあります。ですから、結局のところは、大手メディアというのではなくて、ちっちゃなメディアでも、ちっちゃな個人でも、そういうところから正しい情報をみなさんに、できるかぎりお伝えをしていくというようなことをわれわれが努力するしかないかと。そういう意味では個人レベルでの努力しかないのかと。それを受け取るみなさま方がそれをどう精査していくのかというところが結局問題になってくるのではないかと。

そのプルトニウム人体実験の中にも書いているんですけど、アメリカではこのビキニ事件に関わったジャーナリストというのはほとんど殺害されていると言われてます。それはエネルギー省というところがペンタゴンと並んで非常に危険な機関で、そういうことが現実的に起こっていると書かれています。非常に難しい問題ですので、これに取り組むというのは非常に大きなリスクを背負うところがあります。放射能というこの難しい問題に関しては、そういう難しいところを抱えていますから、お互いにそこを頑張って、正しいものを放送する、受け取るというところをやっつけていかないといけない。いま、本当にスタートラインに立ったのではないかと考えています。

高橋 ご質問、ありがとうございます。アルバカーキー・トリビューンの話が出ましたので、それに関連する質問から答えさせていただきたいと思います。1990年代に、アルバカーキー・トリビューン紙が報道したことによって、アメリカのエネルギー省が人体実験に関連する資料を公開し始めました。私もアメリカ国立公文書館で入手したそうした資料に基づいて「封印されたヒロシマ・ナガサキ米核実験と民間防衛計画」をはじめとする研究をすることができたのですけれども、アメリカ原子力委員会は、人体実験によって、内部被曝の研究を思い切りしていたわけです。資料の中には、かなり骨に関する分析データであるとか、歯に関するデータ、尿であったり髪の毛であったりとかいろんなデータが記入されております。アメリカ原子力委員会としては（内部被曝の）影響はないとしておりますが、そうしたデータをもとに、いろんな角度から本当に改めて分析し直す必要があると思います。

乳歯の保存についてご質問がありました。「福島原発被災に心を痛めた広島・長崎の被爆者の全国組織・日本被団協が、事故発生後、政府に出した要望書の第1番目は、被災者、避難者にもれなく罹災証明、被災証明の発行をとというものでした。自分の被曝を認めさせるのにどれほど苦労してきたか、辛い体験に基づいて真っ先にあげたのですね。今、政府、東電のモニタリング調査が後手後手にまわる中、被災地のお母さんが子どもさんたちの抜け落ちた乳歯を保存しておこうとの、先生の呼びかけに関心を持ちました」と言われ、①過去の原子力災害で乳歯から放射性物質が検出されて、被曝との因果関係がクローズアップされたことはありますか。②乳歯をどこに持って行ったら分析してもらえますか。③これは被災地のお母さんたちへの呼びかけか、京都をはじめ全国で取り組むことに意義はありますか。④証拠を残すという意味では、髪の毛も放射性物質を検出する材料になりますか—とのお尋ねです。

この呼びかけというのは、私個人として歴史学をやってきた者、原子力委員会の資料を読みあさってきた者からの提案でありまして、これから後、乳歯をどういう形で分析していくのかは、それこそ矢ヶ崎先生をはじめとして内部被曝に非常に熟知している先生方と

相談しつつ、また市民のみなさんと相談しつつ、とにかく原子力委員会のやってきたようなやり方ではなくて、本当の意味で被災者のために保存して分析するにはどうしたらいいかという方策を、早急に取り組まなければいけないと思います。分析機関については、もちろん協力してくれる大学も今後出てくるとは思うんですけども、とにかく内部被曝を極めて重視して、問題意識がある研究者に分析してもらおうというのが大前提になってくると思います。私も実は育児休暇中は東京に住んでいたんですが、まさしく1歳児を抱える親として、原発事故の被災地は広い範囲に及ぶと思っております。かりに影響のない人も、この地域はなかったという証明にもなるわけなので、できるだけ広い範囲で呼びかけていったほうがいいんじゃないかと思います。また、髪の毛や尿や血液や、言いにくいんですけど精子も、第五福竜丸事件の時にはアメリカ原子力委員会までわたって分析されておりました。ですから、大事なものは、データを加害者側の中に隠ぺいするのではなく、本当に人びとの間で共有することが必要だと思います。

関連するものとして、福島県の内部被曝の将来にわたる影響を広く知ってもらうにはどうすればいいでしょうかという質問をいただきました。やはり過去に学ぶというのが本当に大きいと思います。そうした取り組みを山下先生、伊東さんがされていますし、私も歴史的な資料分析を通じてやっているわけですけども、過去から学び、将来の被曝を未然に防ぐための積極的な提案が本当に必要になってくると思います。

アトミックソルジャーなどアメリカ側でも核実験などによる放射線被害を訴える者がいると思うが、それらの人びとの主張と問題点は、という質問をいただいています。アトミックソルジャーと言われる人たちは、アトミックベテランズ（全米被曝退役軍人会）という組織をつくって、アメリカ政府が、病気が発生したら補償するというシステムがもう出来ております。私は、それ自体はすごく大きな前進だと思うんですけども、私の同僚のロバート・ジェイコブス准教授（広島市立大学）がそうしたアトミックソルジャーの研究をしまして、彼によると、彼らの心因性ストレスとか心理学的な調査資料は入手しやすいけれども、肝心の被曝情報そのものが入手しにくい、国家機密扱いになったりして入手しにくいと言っています。ですから確かに補償はしているのかも知れないけれど、本当の意味で因果関係を証明しようという姿勢がアメリカ政府にもなく、それを示す証拠も抜け落ちているというのが現状だと思います。

原発導入について日米両政府間に何があったのかというお尋ねですが、当時、ビキニ水爆被災で反米、反核世論を抑えるためにどうしていったらいいかという試行錯誤をアメリカ側は思い切りやっけてまして、そうした中で原発技術の導入、それと引き換えに日本政府と協力するという関係がありました。しかもそれを示すような、証拠になるような資料、かなりの文書が未だに機密扱いだということを、先ほどの話にもあったアメリカ原子力委員会の資料の中で押さえております。ですから、私のこれからの課題でもあるわけなんですけれども、日米間のビキニ水爆被災を隠ぺいする工作があると同時に原発導入があったというシナリオ、それに関連する情報公開を強力にこれから進めていく必要があると思います。ご質問、ありがとうございました。

山下 出荷停止されたマグロはどうなったのかというご質問です。最初は地中に埋めたり

していたけれど、結局、海洋放棄です。大体、1日か2日、野島沖という所まで行って深い海の中に沈めたという処置の仕方をしています。

汚染魚加工品について心配されていると思いますが、加工すると見えなくなるので、どういう食材に転換されていくかということが非常に分かりにくい。だから、先ほど言った生協とかも含めて監視を進めていく必要があると思います。

食べるものはどうしたら、という質問がありあした。食べて支援するという事に疑問を感じるということですが、私は福島に行ってまずチリメンジャコを買いました。加工業者の方を尋ねていったら、大変困っていてあの事件以来、たとえば北茨城の大津漁協なんか操業していませんから、チリメンジャコにできずいまあるのは去年のものです。大丈夫です。つまり、生産者と協力しての支援の仕方もある。だけど、きちっと説明できるものでなければいけないのだということだと思います。そこで、放射能検知器を全国に、生協だとかを含めて市民が直接検査をするという方法を広げる必要があると思います。市民の力で監視していく、そういう力を強めながら、政府に対して、専門機関に対してきちっと要求していくことがいま必要だと思います。

核実験のフォールアウトによる影響について。やっぱりビキニの時は爆発させるわけですから、そのままの放射能が拡散するわけですね、それはものすごく大きいものです。地球を何周も回って北半球のほとんどが汚染されて、未だに学校のグラウンドの土中にはその当時のストロンチウム90が残っているとされていますので、それをまとめて自然放射能と言っている。その時、降った放射能も入っている。拡散された大気汚染はビキニのほうがひどいと思います。ただ今度の福島は、出された放射能総量は相当大きいですから、ビキニほどはいかないですけれども、量が大きいということで、しかもそれが行方不明ということなんです。

いま大事なのは、特に地下水の汚染だと思いますね。わからないではすまないわけですから、どうなっているかをしっかり政府に調査させること。それと、この間、地質学者が登場してきてない、やっぱり地質学の専門家を入れて、地下水汚染の見通しとかを含めて防御の仕方を国民レベルで考えていかないといけない。これだけ重大な地下水汚染が起きていると言われて、海産物の汚染というのが止まらない。ヘドロに出た放射能は、内陸部が広いところの海底にたまったものは、台風が10回くらい来ないと動かないと思います。大規模な台風が来たら沖に出る可能性はありますけれど、逆に岩手の海に流れる危険性もありますので、これから海の放射能汚染が福島原発問題の焦点になると思います。

「学力神話」の話をしましたけれど、最大の加害者は東電の株主ではないかという質問をいただきました。「週刊現代」に載っていましたが、鳩山元首相、石破元防衛庁長官、田中真紀子さん、小沢一郎さん、彼らは大株主だそうですね、東電と深い繋がりを持って来た政治家だと思います。実はこういう人たちが菅おろしの先頭に立っていることに気がつけてください。つまり現在、菅総理を攻撃することを中心にやっているように見えますけれど、代えようという勢力は、原発を推進してきた勢力です。菅総理をおろして代わったらもっと悪くなり、規制しているものも規制しなくなる。つまり、ビキニ事件の時に、吉田内閣から鳩山内閣に替わって被害調査を打ち切った。それと同様に、東電の影響力の強

い官僚が、巻き返しの中で打ち切る危険性があるということを十分注意をする必要があると思います。

山根 矢ヶ崎先生の前に、先ほどお話ししましたけれど、原爆症訴訟近畿弁護団の久米弘子弁護士さんに、舞台の上でお願いいたします。

久米 弁護士の久米です。貴重な時間をお取りするのは大変心苦しいのですが、これまで国が原爆症訴訟の中で言ってきた内部被曝についての嘘が、今回の福島原発事故で明らかになってきたので、ちょっとその点をご紹介します、みなさんのご理解とご支援をお願いしたいと思いました。

原爆症訴訟についてごく簡単に説明します。被爆者の方が現在病気になっていて、その病気が放射線によるものである（放射線起因性といいます）場合に、その認定がされたら医療特別手当が支給されます。しかし、これまで認定された人は被爆者健康手帳取得者の1%にみたないという状況でした。そこで認定請求の却下に対してその取り消しを求める訴訟をやってきました。

お手元のペーパーにも書いてありますが、長崎原爆訴訟の松谷さん、京都原爆訴訟の小西さん、東京原爆訴訟の東さんとかが大変困難な中で、勝利しているわけですが、一人一人の方が勝訴をしても、救済はその人限りで、残っているたくさんの被爆者たちが救済されないということがあって、全国で訴訟を起こしようということになりました。近畿の弁護団が一番最初に2006年5月12日に勝利判決を勝ち取りました。原告9人全員勝訴でした。その後、全国の裁判所で連戦連勝し、判決がある度に勝訴、勝訴、勝訴ということで、これでも国は認定基準を改めようとしなれないのかと言われ続けて、国はやっと少し基準を変えました。

けれども、変えた認定基準でも救済されないケースが相次いでおります。このため集団訴訟を終息する予定だったのが、いままた改めて訴訟を提起しなければいけないという事態になっているわけです。

それでは、国がこれまでの訴訟の中でどう言ってきたか、特に内部被曝についての嘘です。国はまず近距離の直爆（直接被曝）しか原爆症にはならないんだと言ってきました。内部被曝はもちろんのこと、大体2キロよりも遠い所の被爆者も、被曝による病気になんかならない、こう言ってきました。国がいつも主張してきたのは、「この原告たちは原爆の放射線になぞ被曝していない」。被爆者を前にしてずっとそう言い続けてきたんです。被爆者の方々は、本当に怒り心頭という状態でした。

内部被曝について、国の主張は次のとおりです。「内部被曝の影響は無視し得る程度のものであることが実証されている。内部被曝を重視するのは古い時代の単なる仮説であり、その仮説は理論的に誤りであることが証明され、かつ実証的にも否定されており、およそ内部被曝の影響を重視する根拠になり得ないものであることが判明している。放射線の人体へ影響が未解明であることを強調し、わずかな線量の放射線被曝によって様々な疾病が発症したとする見解は（これは私たち原告が言っていることです）今日の放射線医学の常識に明らかに反しており、放射線医学の安全対策は根本的に見直されないといけないうし、多くの患者の命を救っている放射線治療はわが国では用いることができなくなる」というものでした。内部被曝などあり得ないんだと。国のこの主張は裁判で司法からも厳しく批判されました。

ですから、私は今回の事件が起こって、福島の被曝者の方がた、近隣の避難されている方がた、本当にお気の毒だと思ふと同時に、今日のシンポの中でも再三言われておりますけれど、テレビで「いま直ちに健康に被害はない」という発言がされる度に、テレビに向かって、(テレビに向かってもしようもないんですけれども、)ウソつき、ウソつき、ウソつきとずっと言い続けていました。その嘘が次第に明らかになってきている。2 kmどころか20 km～30 kmで避難させられている。原爆のときには放射線のおそろしさなど全く知らなかったので、直後の爆心地へ家族を探したり、死傷者の救護やガレキの処理のために多勢の兵隊や女学生たちが入市して被曝しています。もちろん防護服はありませんし汚れた水や飲物をそのまま食べています。これまで内部被曝を主張して国の嘘を指摘し続けてきたお医者さんや学者の先生方は、国の方からはないがしろにされてきましたが、今回の事故をきっかけによりやく採用されるようになってきました。安齋育郎先生も矢ヶ崎先生もテレビに出られました。安齋先生ご自身、画期的なことと思つておられると思ふんですけれども、そういう状況になってきている。私たちは原爆症の集団訴訟の中で、この福島で明らかになってきたことも生かし、よりやくはつきりしてきた嘘をあきらかにしながら、是非とも訴訟に勝ち抜いていきたいと思つております。どうぞご支援をよろしくお願ひします。

山根 ありがとうございます。では、矢ヶ崎先生、大変申し訳ないのですけれども、16時50分までよろしくお願ひします。

矢ヶ崎 いま、何時ですか。

山根 私の時計では16時40分です。10分しかありません。すいません。

矢ヶ崎 たくさんご質問をいただいておりますが、いまちようどご発表があつた原爆被曝者のことについて関連する質問を受けております。たとえば、広島・長崎では戦後復興が早かつたが内部被曝の影響は隠されてきたのか。また、いま苦しんでいる人がいるのかというようなこと、あるいは体調不良のグラフについてのご質問、内部被曝と劣化ウラン弾についての質問などがあります。

広島・長崎の戦後復興に関連してひとつ指摘できる大きな自然の条件として、枕崎台風及びその後の大雨があります。先ほど、私の報告では、アメリカが科学者に命じて、放射性の降下物、放射性の埃がなかつたことにする絶好の材料に使われたと申し上げましたけれど、枕崎台風は広島・長崎の地に降つた放射性降下物をあらかじめ洗い流してしまつた。だからそれ以後の被曝ということについては市民は大局的には免れることができたといふ大変なメリットがあつたのです。いまの福島はそれと比べて、非常に深刻な状況にあります。内部被曝が公式には隠されてしまつた放射性の埃を吸い込んだり、食べたり、飲み込んだりして、これがもとで、非常にたくさんの方が健康を害しております。

私の大雑把な推計ですが、いま被曝者と認められている原爆の健康手帳を持っている人が内部被曝を隠された条件で23万人です。内部被曝を入れると100万人の方が該当する要件に達していると思ひます。多くの方が基本的には何の保障もされずに、自己責任で言

われて、病気に苦しんで治しているのです。66 年経ったいま、がんなどが発症して病院に入っている方がいっぱいおられます。晩発性というのは、具体的な現場を押さえていくと非常に深刻なものがあります。

どれだけの放射能の埃を吸い込んだりしたか、内部被曝があったかと言いますと、これは沢田昭二先生（名古屋大名誉教授）が被爆者のアンケートをきちっと材料にして、例えばアンケートで、脱毛する、下痢があった、あるいは皮膚に紫斑があったというデータを分析する。そして、そういう症状が、どのくらいの線量を浴びたら出るかという、外部被曝をもとにした ICRP の統計的数字とも付き合わせて調べ、整理をして、すべての症状が表せるような、そういうカーブを得ました。その結果は、内部被曝の線量として 6 キロ、7 キロという遠くにわたっても 1 シーベルトという強い値が出ています。この値そのものは非常にリーズナブルなものだと思います。チェルノブイリでは、ヨーロッパ放射線リスク委員会の方たちが統計調査をして、ICRP 式に外部被曝何ミリシーベルトと呼ばれている量と比較して、平均して 600 倍すれば内部被曝の実態を表すことができると言っております。私も別の形で試算してみると、それは十分 1000 倍にもなり得るような状況です。それは身体全体で同じエネルギーを割ってしまうと 1 ミリシーベルトにしかならないが、1 cm 球でその中に全エネルギーを入れるとすると、これだけでも 1000 倍を超えるのです。このようにいろんな方法で、ICRP が認めようとしないうるリアルな実態の解明が進んでいます。

次に、アルファ線、ベータ線の体内での範囲とか、破壊された DNA はどうなるのかとかいう被曝のミクロの実態に関する質問があります。福島の放射能で特に言われているのはヨウ素とセシウムです。ヨウ素の場合、外部被曝として考えるのはガンマ線 1 本だけなのですが、身体の中に入った場合には、まずベータ線を出してキセノンという物質に変わります。ベータ線と同時にガンマ線を 1 本出します。これがヨウ素のガンマ線と呼ばれているんですが、もう 1 本キセノンのガンマ線が出ます。身体の中では確実に 3 本出て、エネルギーとしては 4.5 倍になりますね。内部被曝としては、身体の中で放射をして、次の物質が変わって、これが不安定でさらに放射を続けていくという、こういう連鎖がありますので、内部被曝は外部被曝で単純に量ったよりもはるかにひどいものです。

次の質問。国に内部被曝を認めさせるにはどうしたらいいか。あるいは日本人の健康を守るために何かできるでしょうか。そのほか実態的なご質問がありますが、まず、国民が声を上げる、これが決定的だと思うんですね。

私は理科の教員をやっていたんですが、理科に関する教育達成度の調査をしている国際組織がありまして、これが OECD なんかと協力して国際的な市民の意識調査をしました。1 つ例をとりますと、政府の科学技術政策を支持しているかっていう項目に対しては、日本がダントツ 90 何%、その次にフランスが続いて数%の差。日本とフランスはすごく支持率が高かったんですね。ところが、それに続く、最近の科学技術的な発明、うちで使っている電化製品のこと、あるいはノーベル賞、どんな人が何をやったか、こういうような興味と関心についての質問に対しての回答率は、フランスが 80% 台で興味を持って見ている。日本は 20% 台だったと思います。ということは、「日本人の実態というのは、何か分からないけれどお上の言うことはいいことだ」と、これがすごく多いんですね。いまの内部被曝の問題に関しても、いいか悪いか学者が勝負して決めてくれ、それに従って俺たちは対応するんだという姿勢がかなり目立っている、そういう実態があると思います。やっぱりき

ちっと物事を判断して、専門家が言っていることがいいか悪いか、「あんた、けしからんことを言っているじゃないか」というような自らの判断にもとづいて声を上げてくれないと、ICRPなんか絶対、変化しないんです。もう権力に守られて、非常に悪い防護体制が作られています。だから、いかに正しい知識を獲得して、それに基づいて主権者として声を上げていくか。これが一番求められている。もちろん、科学の内での自浄作用が必要です。いま、市民の中から「本当はどうなんだ」といろいろなところにきちっと確認して、自らの意見を出していくという動きが出てきたことは素晴らしいことだと思います。

大事なことは、みんなが団結して、1つのことについては、お前とは考え方が違うから、求めることは一致していても「おまえはあっちでやれ」ということはしないことが大切だと思います。特に私が沖縄に行って強く感じているのは、沖縄の知事選挙や参議院の選挙区選挙なんかでは野党が協力して統一の候補者を立てている。特徴的なことは共産党も含めて共闘しているんですね。沖縄の人たちは基地問題では、基地はいらないという声をあらゆる形で集めている。

1960年の安保条約改定時に、自民党に対して全野党が反対をした。マスコミも原理的な主権を守る姿勢でキャンペーンをした。これに対して、アメリカは日本の国を長期にわたって安全に支配していくにはどうしたらいいかという非常に壮大な計画を立てるに至った。ケネディ・ライシャワー路線と言いますけれど、要は自民党に代わる、自民党という固有名詞を出して申し訳ない、共産党という名前も出して申し訳ないと思いますが、アメリカと協力していく、支配的な立場をとれる政党をいかに多くするか、それからもう1つ、人びとが1つの課題で力を合わせるのをどういうふうに分断していくのか、これを極めて規模の大きな計画の上でやったんですね。手法はアメリカに政党の幹部、労働運動の幹部、平和運動の幹部、マスコミの幹部、特に学者、全部呼んで、アメリカナイズしてうんと良い条件を与えて返していく、こういう政策が行われました。それがやっぱり、1980年ぐらいから効果を表してきて政党の共闘なんか分断されていきます。ここらのところからマスコミそのものが支配体系を維持するためには有害な不必要な情報は流さないというようになっていく。要するに、私どもは戦後ずっと続いてきた、このアメリカの支配、強いられた支配体制の中で従順に生きることを強制されてきた。こういう枠組みをもうやめようじゃないですか。主権者が日本の主権のもとで生きられる日本を確立しようじゃないですか。これが一番、私の訴えたいことであります。これがあればすべて解決する。

すみません。あと、答えなくてはいけない質問がいっぱいあるんですけど、時間がなくなりました。

閉会あいさつ 望田幸男（非核の政府を求める京都の会代表）

山根 ありがとうございます。最後に、本日のシンポジウムの共催団体を代表して、非核の政府を求める京都の会の代表、同志社大学名誉教授の持田幸男先生に閉会のあいさつをお願いします。

望田 どうしたものの、講師メンバーではない私にも会場より質問がまいております。それは、「いま、こうした『お勉強』だけやっていてよいのか。つぎの行動の企画として何を考えているか」といった趣旨のことです。私も思いは同じようでございますが、

いまは多くの団体の連合共催の「閉会の言葉」という性質上、私の思いだけはにじませながら、一言、ご挨拶申し上げます。さて本日の集会にお集まりの皆さんには、たいへん長時間にわたりご参加いただき、ありがとうございます。260名の参加者がございました。

「入れ物」がいささか大きかったので、心配をいたしておりましたが、どうやらゆったりした座席状況でお聞き願えたようでありました。スタッフのみなさんの奮闘もさることながら、マスコミのみなさんのご支援にも助けていただいたのではないかと考えています。また講師の方々には、それぞれ遠方からおいでいただき、重要な情報や深い知見をご披露いただき、ありがとうございます。あわせて御礼申し上げる次第です。

さて、もはやなにかを付け加えるようなことはさしひかえるべきだと思いますが、一言だけ申し添えさせていただきます。本日の催しを通じまして、もっとも鮮烈にあきらかになったことは、放射能問題、とりわけ内部被ばくに関することであり、しかも日米両政府が広島・長崎からビキニを経て、福島にいたるまで、これに関する真実をおおいかくしてきたことです。これは、いわば戦後史を貫通する歴史的病根ともいうべきものであり、「原発時代の日本」が今日まで続いてきた理由でもあります。ここで私たち自身がなにをなすべきか考え込まれます。原発の危険について長い間、きびしく批判してきた京大原子炉研究所の小出裕章さんが、ある講演のなかで「原発をとめられなくて申し訳ない」と話しつつ涙ぐんだそうです。原発を推進してきた人とか、原発をとめろとは叫んだことのない人が「申しわけない」というのは当然かと思いますが、そうした責任からまったくまぬがれている小出さんが反省の言葉を吐かれているのです。これを聞く時、逆に私たちは、私たち自身の責任感を痛感せざるをえません。事実、小出さんの講演を聞いていたなかに柄谷行人さんという有名な批評家がいまして。いまや70歳のこの学者が、小出さんの話に感動し、ならば自分の責任を果たそうと、反原発のデモに出ようと決意されました。柄谷さんがデモに出たのは、なんと50年ぶりのことだったそうです。小出さんの問いかけに対して、柄谷さんはご自分の応答をこのような形で見せられたのです。ならば私たちはどうするのか。この点で本日の催しは、私たちが真実に、放射能や内部被ばくの真実について知らされず無知であったこと、このことが今日までの「原発時代の日本」をつづけさせてきたことを逆に教えてくれています。専門家というものはすごいですね。政府が隠しに隠してきたことを、白日のもとに暴露してくれたのです。しかし専門家の仕事はここまでで、ここから先は私たち、みなさんの出番です。私たちの責任の果たし方は、ここで明らかになった真実を知り、それを多くの人びとに広めることです。これによって「原発に悩む日本」に終止符を打つ可能性が開かれてきます。いずれ本日のことは、しかるべき印刷物になると思います。それをみなさんの手で広めて下さい。こうした行動のなかに、小出さんの涙の問いかけに対する私たちの応答があるように思います。本日が、そうした方向にむけての一步となればと願っております。では、以上をもちまして、本日の催し、幕を閉じさせていただきます。長い時間、ご苦労様でした。